

平成23年度 広島文化学園大学公開講座「子育てと科学のキセキ」第2回

## 「科学界のインディジョーンズ」の父親業

広島大学 生物生産学部（大学院：生物圏科学研究科）准教授

長 沼 毅（ながぬま つよし）

日時：平成23年11月19日（土）

場所：広島文化学園大学 広島 長束キャンパス音楽講義室

長沼 毅氏のプロフィール

筑波大学大学院 生物科学研究科博士課程 修了

筑波大学 第二学群 生物学 卒業

理学博士



初めまして、21歳の娘と19歳の息子の父、50歳の生物学者です。仕事に自信はありませんが、大好きで続けています。でも、娘も息子も僕と同じ生物学者にはなろうとは思っていないようです。

学者は、才能もありますが、育った環境も大事なので、子供が小さい頃から学問的な雰囲気を出そうと工夫したつもりです。また、ファミコン禁止という困難な努力もしたつもりです。さらに、エアコンなしで親子揃って忍耐力を育てたつもりです。

そこまでしたのに、一人も跡を継いでくれないなんて。なにも生物学の名門ハックスレー家やノーベル賞親子（数組いますね）なんて妄想を抱いているわけではありません。ただ、卓袱台<sup>ちゃぶだい</sup>でパソコン叩いてる親父の背中って、自分で思ってるほど魅力も説得力もないんだな、と無力感を覚えるのです。まあ、最近は脱力モードに浸っていますが。

この歳にして教授にもなれず、月給は手取り30万円に満たず、部下もいず。家内の方が地位も稼ぎも良いくらい。まさに「うだつが上がらない」親父の典型ですね。それなのに、当の本人は「うだつ」の意味や語源を調べて御満悦、ダメな親父だなあ。でも、これが僕の望んだオヤジ像、とても幸せなんです。

僕の父は船乗りでした。実家は会津若松の煎餅屋でしたが後に没落、昭和5年生まれの子は男ばかり6人兄弟の4番目。15歳のとき海軍の予科練で終戦を迎え、その縁あってか、外国航路の貨物船の甲板手になり、甲板長（ボースン）で定年退職。僕はその一人息子でした。

子供だった僕にとって、父の職場「船」「海」はまったく未知の世界でした。一年に二、三回、しかも、たった一週間程度の帰宅でしたが、船に連れて行ってもらえるのを楽しみに待ちました。港ってエキゾチックな雰囲気があるでしょ、特に貨物船だとドラヴィダ人（南インドの民族）が乗ってたりして、その神々しい漆黒の肌に感動したもんです。

何年かに一度、父は三か月くらいまとまった休暇が取れました。そんな時は、父は兄弟の仕事を手伝ってトラックの運転してました。僕もそれに同乗し、実にいろんなところに行ったなあ。風景や食べ物は覚えてます。しかし、何を話したかは、まったく覚えてないんです。それが今になって残念で仕方ない、痛恨です。

父は寡黙な人でした。でも、言いたいことや伝えたいことがあるのに、あえて黙して語らず、つてのじゃないんです。つまり、「男は黙って〇〇

ビール」の三船敏郎さんや「不器用ですから」の高倉健さんみたいじゃない。本当に何も話することがない、って感じでした、最後の間際まで、「ねえ、何も語り残すことないの」って聞きたくなるくらいでした。結局、遺訓を残すこともなく父は逝ってしまいました。

それで僕は思ったのです、寡黙なだけじゃ気持ちや考えは伝わらないし、背中を見せてるつもりでも子供は見えていない。だから、僕は家内や子供たちとは、いろんな思い出を共有し、たくさんのお話を語り合おうと決めました。

はい、ファミコン禁止とエアコン忌避は厳しいと思いますが、それ以外は子供に大甘です。まず、「テストで良い点を取ったらご褒美」という子育ての禁じ手は、うちではむしろ標準装備。ご褒美がインセンティブとなって勉強する、いや、ご褒美なしには勉強しないようになってしまいました。

きっと、僕は自分が小さい頃、百点満点を取っても当たり前、褒めてもらった記憶がないので、そのリバウンドなんでしょうね。つまり、本当は子供へのご褒美じゃなくて、報われなかった自分の過去へのご褒美なんじゃないかな。まあ「育児は育自」とか「教育は共育」とか巷間に喧伝されてますよね。ミーハーな僕はそれで満足しちゃって、当然、子供もミーハーです。

こんな安易なご褒美インセンティブが吉とでるか凶とでるか分からないけど、子供には楽しい子供時代を過ごしてほしい。僕はあえて求めなかったけど、心の底では父親に甘えたかったんだろうな。もっと語って欲しかったんだろうな。キャッチボールしたかったんだろうな。だから、僕は、過去の空白部分を補完するために、子供を甘やかしてるのかもしれない。

観てツーツと涙が出たのはファンタジー野球映画『フィールド・オブ・ドリームス』。ここではトウモロコシ畑の農夫（ケビン・コスナー）が主人公なんですが、その父親が生ける屍みたいに覇気がないんですが、ラストシーンで農夫が父親の幽霊に呼び掛けます、「Hey…Dad? You wanna have a catch?」（父さん、キャッチボールでもしない?）。これで一気に込み上げてくるのです。長い間、言いたくても言えなかつただろう一言で、二人の魂が救われた、って。

でも、僕は、幽霊じゃなく生身のうちに救われたいので、たまに息子に声を掛けてます、「キャッチボールでもしないか」って。やりだしたら全力投球ですよ。最近でこそ息子も大きくなって速球も捕れるようになりましたが、息子が小さい頃は酷だったかも。今や大きな息子には、全力投球しても簡単に捕球されるし柵越えを打たれるし、僕の方が遊ばれてるみたいです。それが、映画じゃない僕自身のフィールド・オブ・ドリームス。

映画の農夫は父親の跡を継いだのですが、僕の息子は違うみたい。邦画の『UDON』に似ています。生前は頑固一徹だったうどん製麺屋の親父が、亡くなったあと幽霊になって、跡取り息子に「おまえはおまえの夢を追え」と背中を押すのです。それまですれ違っていた父子の気持ちも、いつかは融け合う時が来るって映画でした。

僕にもいつか、亡くなった父が語ってくれるのかも知れません。でも、それはやっぱり映画の中のことかな。僕には父の幽霊よりも、今、ここにいる息子の方が大事だから。幽霊じゃなく生身の父親として、息子の背を押したいと思うのです。

僕の家系は父方も母方も短命です。父も母も67歳で亡くなりました。以前、南極に行ったことがあるんですが、発つ前に、本人の健康状態や病歴はもちろんのこと、祖父母の代まで遡って病歴や死因を調べるんですね。その時はじめて、父方も母方も薄命系、67歳はまだ長生きの方であることを知りました。

こんな感じで、僕は自分の人生について67歳をゴールとして考える癖があります。67歳まであと何年、というように。今は50歳なので17年ちょっとですね。この間、けがや病気がなく健康に過ごしたいというのが第一の願いですが、欲が出ると、何か世に残る仕事がしたいとか、世の中に貢献したいとか、要するに「人に認められたい」というきもちになります。残された時間内で、何か偉大な功績や満足できる業績を残さねば、と焦るわけです。

その一方で、これはほかの誰でもない自分の人生なんだ、おれの好きなように生きてやる、なんて考えたりもするから面倒なんですね。それに拍車をかけたのが『54歳引退論』（布施克彦著、ちくま新書）。これは面白い意見で、「二回結婚論」

(若いときは年上と結婚して死期を看取り、その後、若い人と結婚し直すという老若カップル循環論)と同じくらい、僕の人生に影響を与えています。いや、実際には家内の方が若いので、僕の二回論はないのですが。

いや、自分のことは良いとして、父親の立場だと、やはり子供のことが心配になります。下の子(息子)は大学院進学の可能性があるので、54歳引退論を考え直さねばならないかもしれません。僕も家内も大学院に行ったので。子供もそれが当然と思ってでしょうし。そうでなくても、大学院への進学って、最近では珍しくないでしょ。親としては一応、覚悟しとかなきゃ。

息子のことでなく、娘の話もちょっと。娘は味のある子です。赤ん坊のころ、あまりにも言葉が遅いので、小児看護が専門で助産師でもある家内が心配してました。でも、僕はいつも「この子は大丈夫だよ」って確信ありました。だって、雨の日は雨だれの音をじっと聴いているし、お風呂でシャワーの音をしげしげと聴いているし、トイレに手を突っ込んでも音遊びしてるし。シトシトピッチャン、ジャバジャバ、チャポチャポ、雨もシャワーもトイレもみんな水の諸相なんだ、って感性を磨いているんです。食用油を頭からかぶったのも、感性磨きの一環だったのでしょうか。

言葉が遅いなんて、後でいくらでも取り返せません。でも、感性は、磨くときに磨かないと伸びなくなる。自分でどんどん感性を磨いている赤ん坊を目の当たりにして、本当に素晴らしいと思いました、神様か仏様からの預かりもののように思えたし、今でもそう思っています。

それほど味のある娘なのですが、どういうわけか価値観や嗜好は僕と似ているのです。世間でもよくあることなのでしょうが、父と娘、母と息子が似るってというのは。面白いもんですね、食べ物の好みはもちろん、食べ方まで似てるって。白飯が苦手とか三角食べができないとか好物を最後まで残して置くとか。息子と家内は白飯が大好きなんですけど。

笑いのツボも娘と共有する方が多いかな。テレビなんかで、アニメでも、教養番組でも、ニュースでさえ、ククッとツボ笑いしてしまう場面は娘とかぶります。もちろん、息子のツボも一応は抑えてるつもりです。一緒にお腹が痛くなったほど

笑ったのは故ナンシー関さんの『記憶のスケッチアカデミー』を家族全員でやったときですね。

僕が息子と共有するのは美味探究でしょうか。とくに、海鮮や牛馬などを問わず、お造りが好きです。だから、たまに息子と二人で寿司屋に行ったり、泊りがけでグルメ旅行したりしてます。そのために学校を休ませたこともありましたね。父親にあるまじき行為なのかも知れませんが、息子が自分で休むべきでない判断した時は断ってきますので、そこは息子に任せてます。

父親にあるまじき行為といえば、僕は朝ごはんを食べないんです。子供は学校で「朝はしっかり食べましょう」って教わるんですが、父親が食べずにケロッとしてるんだから、何が正しいんだか分からなくなってしまいますよね。でも、それで良いのです。朝はしっかり食べる人もいれば、そうじゃない人もいます。あの偉大な日野原重明先生(聖路加国際病院理事長)だって朝食抜きですし。

子供にとって、「朝はしっかり食べましょう」という教条主義でガチガチになるより、僕が朝食抜きなのは、だらしのないのではなく教育的なのである、って屁理屈ですね。

僕は朝食だけでなく昼食も抜いています。つまり、ラマダン、イスラム教の断食ですね。断食といっても夜は饗宴だから、ラマダン月にかえて太るムスリム(イスラム教徒)もいるんですって。

ラマダンとは本来、断食月であるイスラム暦の第9月(年により変わります)を指します。だから、断食はひと月だけです。ところが僕は、ひと月どころか、かれこれ三年くらい継続しているので、よくムスリムから尊敬されます。でも、その尊敬はすぐ消えてしまいます。イスラムは禁酒教ですが、僕は酒呑教だからです。教義は酔生夢死。こんなラマダン親父の世迷言をさらに続けます。

そもそも僕がラマダン(イスラム教の断食)を始めたのは、宗教的ではなく健康上の理由でした。つまり、痩せるため。膝が痛くなったので医者に診てもらったら「体重で膝に負担が掛かってる」と言われたのです。それで痩せようと思ったのですが、ダイエットというとなにか辛そうに聞こえるけど、ラマダンなら夜は食べてもいいんだし語感もかっこいい気がしたんですね。

僕のラマダンは、会食など必要があれば朝でも

昼でも食べますよ。だから、僕のはハード・ラマダンじゃなくてプチ・ラマダン。ますますかっこ良く聞こえるでしょ。ダイエットで一番つらいのは継続なんです。でも、プチ・ラマダンなら、短期的な減食効果は小さいけど、気楽に長続きできるので、長い目で見ると確実に健康的に痩せられるのですよ。

つまり、ダイエットなんて超簡単、何もしなきゃいいんです。朝も食べなければ昼も食べない。無理に運動する必要もない。それなのに、皆さん、ダイエット食品や飲料を買ったり、わざわざお金掛けてまで運動して。お金や時間がかかると長続きしないでしょ。だから、お金も、時間も掛からないプチ・ラマダンをお勧めします。

うちの子供たちもスリムになった僕を評価してるみたい。瘦身になって体格が息子に似てきたから、服を共有できるのが利点のひとつです。僕だってオシャレしたいし、子供の小遣いじゃ買えないような服を着れるので息子にもメリットあるし。娘も、メタボ腹の父親よりスリムなダディの方がいいみたいです。高校生の娘に好かれるとまでは行かなくても、嫌われなくらいには感情が好転したんじゃないでしょうか。

子供の評価に加えて、そもそも僕の血筋は父方も母方も短命家系なので、メタボ腹だと人並み以上に心配なんです。実際には平均体重よりちょっと重いくらいが一番長生きするみたいですね。僕はちょっと痩せすぎたのが新たな懸念。家系でもメタボでも瘦身でも短命路線は変わらないってことでしょうか。幸いなことに、家内には長命系の血が入ってるようなので、それで子供たちが長く幸せに生きてくれたらいいなとは思いますが。

メタボ腹を克服してスリムになることには、健康面での直接的な効果とともに、達成感という精神的な効果もあると思います、自分にも家族にも。これって目には見えないけど、意外に重要なんじゃないでしょうか。うちの親父だって「やればできる」んだってことが。

「やればできる」って気持ちを持つのは大人でも子供でも大事だと思います。そして、もっと大事なのは、その気持ちを持ち続けること。その現実の荒波で、磯の岩が浸食されるように、自分のやる気も削られていきます。しかし、だからこそ、

「やればできる」の旗印を高く掲げなくちゃ。それが僕の子供に対する務めのように思えてなりません。

「やればできる」の旗印か、じゃ、何度やってもできない子にはどういえばいいのでしょうか。いつもはできるのに大一番でしくじってしまった子には。僕は、本当のところ、人生なんて失敗の連続、って思ってるんですよ。たまに成功したり勝ったりするから欲が出る。成功や勝利にいちやもんつけてるんじゃないんです。そこから生まれる欲が良くないと言ってるんです。

そういう欲は、「考える動物」である人間が本質的にもっている好奇心や向上心とは異質な、俗物的な欲のことが多いですね。しかし、そういう欲を持って「進歩のもと」なんて開き直って恥じない輩が古今東西、勝ち組として跋扈するから、世の中（あるいは個々の人生）が乱れてくるんだと思います。

現実の人生は成功や勝利より、失敗や敗北の方が圧倒的に多くて、それが普通なんです。それでも腐らず、挫けず、くたばらず、短命だろうと長命だろうと、しぶとく生きていく力を、子供に持って欲しいのです。そのために父親は何ができるのでしょうか。僕ができることは、あまり多くないし大したこともない、ただ「勝つまで負ける」ってニコニコしてるくらいかな。

人生の目的とか意義とか、そんなもんあるのかな。目的があるとして、それを達成できなかったら、ダメな人生なんじゃないでしょうか。意義があるとして、それに沿わなかった人生って低レベルなんじゃないでしょうか。後悔のない人生ってのも好まれる表現ですよ。でも、僕は思うんです、後悔したっていいじゃないか、って。「オレってさ、自分の人生、後悔してるんだよね、あはは」なんて一点の曇りなく笑い飛ばせたら最高なんじゃないかな。

曇りがあつたら、それこそダメですよ。子供はちゃんと見抜きますから。自虐的な笑いや自嘲的な笑いは子供に見せちゃいけません。子供の前ではアッハッハと曇りなく笑ってあげましょう。なんて、ぼく自身もなかなかできないんですけどね。嘘をついちゃいけません、って人に説教するのと同じです。嘘をついたことのない人なんて歴史上でも数人くらいしかいないだろうに。

まあ、こんな感じで脱力して慣れないオヤジ業

を営んでます。子供は経験未熟でいつも不安感を抱いているように、オヤジだって（お母さんだって）いつも初めての経験に不安なんです。子供が小さければ小さいなりに、成長したらまたそれなりに、いつも未経験ゾーンでしょ。だからこそ、自分に素直な気持ちでいたいのです。「お父さんは連戦連敗、いつも失敗で不安だらけ、それでも、勝つまで負ければいいんだよ、あはは」って。自分のために、妻のために、そして、娘と息子のために。

### ひとつのエッセイ

ある年の大晦日、テレビ番組をめぐって息子と口論になった。NHKの紅白歌合戦か民放のバラエティか、わが家に一台しかないテレビを奪い合ったのである。まあ、NHKの尊大なマンネリズムは刺激に乏しく、民放の低俗文化主義には辟易するのだが、そもそも、そんなこと言い争う自分自身が最も愚劣なのだ。口論というのは、いったん火が付いたら消火が難しい。周りの者が止めに入ったところで、それは燃料投下にはかならない。火に油を注ぐというやつだ。結局、鎮火せぬまま息子は、わが家で唯一の個室に籠ってしまった。

僕も僕で、こんな家に居られるかと飛びだし、大学の研究室で元旦を迎えたのである。除夜の鐘の夜空にはオリオン座・おおいぬ座・こいぬ座の星からなる「冬の冬大三角形」とその冬限定の「赤い大三角形」が輝いていた。美しい星々が僕を照らす分だけ、僕の後悔の影は濃くなった。家族揃って新年を祝えただろうに、それを僕は台無しにしまった。

その後、息子は、僕が家にいる時は自室に籠るようになった。これが引き籠りか、まさか、僕の家庭でそんなことが起こるとは！こんな時、父としても夫としても、僕は弱虫だ。それに比べ、家内といい娘といい、女は強いと思った。息子の食事は家内が部屋に届け、適当な頃合いに食器を下げる。僕から息子に用事があれば、娘が取次ぐ。僕にはそれが異様に映るのだが、家内も娘も、以前からそうしてきたし、これからもそうするのだという感じで、淡々としているのである。それもそうだろう、僕が居ないときは、息子も茶の間で食事し、僕以外の家族と談笑しているのだから。

僕は家の中にだんだん自分の居場所がなくなってきた。もともと狭い家だ、自分の書斎も机もなく、卓袱台の一角にノートパソコンを広げるのが僕のスペース。食事のたびにパソコンを下さねばならない。その小さなスペースを誰かに取られたわけではない。でも、気持ちの問題だ、すっかり弱虫になってしまった僕は家に居づらくなったので、家の外で過ごす時間が長くなってきた。

幸い、一月から三月まで大学は入試と卒業で忙しく、三月も追出しコンパや送別会などの口実がある。四月は航海に出たこともあって、それこそ家に帰らなくなった。ゴールデンウィークからは外国出張の連続などで、いよいよ自宅で起居寝食しなくなった。出張から出張、宿から宿への日々が続く。目覚めるとまず現在地を確認するのが日課になった。

目覚める前によく見た夢がある。目の前に息子がいて笑っている。僕は、あれっ、いつの間に伸直りしたんだろうと訝りつつ、息子と打ち解けて話すのだ。そして、目が覚めて現実に戻される。なぜ、自分は毎日違う宿で朝を迎えるのか、そもそもの発端は自分が作ったのだ、と。僕は弱虫で悔悟はするけれど、後悔にとらわれず開き直れるのが強みだ。そうして、これからも旅を続けるのだという覚悟ができてきた。

ある日、久しぶりに自宅で眠り、起きた。朝食時、どうせ親父など居ないだろうと高を括った息子が茶の間に入ってきた。居ないはずの僕が居るのを見て、息子は一瞬ドキッとしたようだが、そのまま何事もなかったように座った。そして、僕たちは言葉を交わした。半年近くぶりの「おはよう」、僕の新たな宝物になった。

（当日の講演資料より）